

教科書・「赤い鳥」という場——新美南吉「こんぎつね」論——

Gongitsune in the Japanese Textbook and Akatoris

田中俊男

要 旨

本稿では、小学校における長期安定教材であり、国民的童話文学とも言うべき新美南吉「こんぎつね」を取り上げる。「こんぎつね」本文の問題に触れた後、第一、二章では教科書と「赤い鳥」という二つの場を想定し、きつねが活躍する他の物語群との相関で「こんぎつね」ととらえる。第三章では「こんぎつね」のテキスト分析を試みる。まず情報伝達という観点から反復・反省と遅れの操作を見る。次に「鶴の恩返し」や南吉の他の初期作との共通点を述べ、南吉の作劇術を考察する。

【キーワード】 こんぎつね、小学校、新美南吉、教科書、赤い鳥

新美南吉は大正二年、愛知県知多郡半田町（現半田市）に生まれ、昭和一八年に二九歳で病没した。早世した戦前の童話作家であり、教師をしていたこと、没後に人気が高まったことなどの共通点から宮沢賢治と並称されることも少なくない。

平成二五年は南吉の生誕百年に当たった。地元を中心にイベントが行われ、「日本児童文学」が二年連続で南吉を取り上げ^①、また関連書の出版が相次いだ。変わらない南吉の人気の高さが証明された年だったと言える。南吉を特集した「別冊太陽」（平成二五年七月）の副題には「悲哀と愛の童話作家」^②とあり、「新美南吉記念館」ホームページ紹介文には「哀しみの中にも心の通い合いや美しい生き方といった普遍的なテーマが描かれ」とある。これらが現在流布する一般的な南吉（作品）イメージと言えるだろう。そうしたイメージ形成に最も寄与したと思われるのが、「こんぎつね」である。

「こんぎつね」は、前近代的な村落共同体を舞台に、人間と異類の交差を描いた物語である。発表は昭和七年一月、鈴木三重吉主宰の雑誌「赤い鳥」においてであった。この時作者は一八歳で、「赤い鳥」その他の雑誌に熱心に童謡や童話の投稿を行い、多数が採用されていた。

「こんぎつね」の名が知られるようになった最大の理由は、小学校教科書に採用されたことであろう。南吉作品は昭和二〇年代後半から「おじいさんのランプ」や

「手ぶくろを買いに」の採録があり、初めて「こんぎつね」が載ったのは昭和三一年である。「こんぎつね」はしだいに採録の場を増やし、昭和五五年以降は四年生の全社の教科書に載り続けている。小学校における最も有名な長期安定教材であり、南吉の代表作と目されるようになった^③。平成二六年現在、文庫収録や絵本化の状況を見渡しても、国民的な童話作品として支持を受け続けていると言えるだろう。

だが「こんぎつね」は多くの人々から単に読まれてきただけではない。「こんぎつね」をめぐる語り・書くこともまた活発に行われてきた。長期安定教材という理由から特に国語教育の分野でそれが顕著であり、他分野と合わせて論文が量産され、複数の単独の研究書が刊行されている。また、現場の教員による授業実践発表や報告も相当な数にのぼると思われる。「日本文学」も二〇〇〇年代以降、「文学教育」その他の特集でしばしば取り上げた。

では「こんぎつね」について何が語られ・書かれてきたのだろうか。本稿は「こんぎつね」研究史や教材・授業史の詳細には立ち入らないが、これまで蓄積されてきた問題を広い範囲でカバーしつつ深い考察を加えたものとしては、府川源一郎「「こんぎつね」をめぐる謎 子ども・文学・教育」（教育出版 平成二二年五月）が出色である。たとえば第五章「「こんぎつね」は、どのように教えられてきたか？

―国語学習の中の「ごんぎつね」―と第六章「ごんぎつね」は、どのように読めるか? ―文学教材の可能性―で、府川は授業の軸が時代によって変化することを、「道徳」「文学教育」「主題」「イメージ」「感動」「言語技術」「分析批評」「ディベート学習」「活動重視」「他者との出会い」などをキーワードにしつつ論じていく。府川の論述が教えてくれるのは、教材をめぐる教育的言説がどのように生産され、流通し、衰退していくかを歴史性として相対化することの重要さである。さて、「ごんぎつね」について考える前提として、本文批評の問題を押さえておかなければならない。何が「ごんぎつね」の本文なのか。ここには歴史的な混乱と揺れがあったからだ。「ごんぎつね」研究者にとっては自明のことであろうが、簡単に整理しておく。なお以下の記述は府川の本の第二章及び『校定新美南吉全集 第三巻』(大日本図書 昭和五五年七月) 解題、その他の先行研究を参照したものである。

「ごんぎつね」本文は大きく分けて三種類ある。製作された時代順に並べる。

A 南吉の草稿「権狐」(昭和六年頃)

B 「赤い鳥」掲載の「ごん狐」(昭和七年一月)

C 聖聖歌編集『小学生全集6』(筑摩書房 昭和二六年一〇月)の「ごんぎつね」

『校定新美南吉全集 第三巻』(前出)ではBを底本としており、現行教科書の「ごんぎつね」もこれに従っている(過去の教科書ではCに従っていた時期がある。また一部の描写などを編集部判断でカットし、短縮したものもあった。このような例は教科書ではよくある)。よってBを基準としてA、Cとの違いを順に述べる。AとBが異なる箇所は少なくないが、これは「赤い鳥」の選者鈴木三重吉の手が加わったことによると推測されている。代表的な箇所を二つ挙げる。Aは冒頭の語りの説明がより詳しくあったのがBでは簡略化された。Aで最後の場面「権狐は(中略)うれしくなりました」とあるところが、Bでは「ごんは(中略)うなづきました」と改変された⁴⁾。

CはBの最後の場面「ごんは、ばたりとたはれました。」が欠落している。これ

は原稿を書き写す際のミスか、印刷工程・校正のミスではないかと言われている⁵⁾。Cは戦後しばらく本文として流布した。

本稿が本文引用する際に底本とするのは、Bを元にした『校定新美南吉全集 第三巻』(前出)に準拠する現行教科書(のうち光村図書)版である。準拠と書いたのはいくつか違いがあるからである。題の表記が「ごん狐」から「ごんぎつね」に、かなづかいが現代仮名遣いに、旧字が新字に改められている。句読点の位置も異なり、漢字がひらがなに変えられている箇所もある。また「とんがらし」の横に括弧付きで(とうがらし)、「おまい」の横に(おまえ)と注記するなど、小学生にわかりやすくする工夫がなされている。本稿が冒頭から「ごんぎつね」という表記を行ってきたのは、この教科書版に従ったためである。

ここから三つのテーマを第一―第三章として「ごんぎつね」の考察を行う。先述したとおり、「ごんぎつね」をめぐる膨大な研究の蓄積がある。その中で議論の対象となっている論点、たとえばごんと兵十はわかり合えたのか、他者問題などをピックアップし、さらに議論を深化させる方法を、本稿は採らない。また「ごんぎつね」を用いた新たな授業方法を提案するものでもない。第一、第二章は作品の置かれた場から、具体的には教科書と「赤い鳥」から作品の位置付けを考察する。第三章は作品の構造について気づいた点を述べる。

一 小学校教科書の中のきつねもの

子供向け読み物の世界の特徴の一つは、動物の活躍である。

教科書もまた例外ではない。とりわけ対象年齢の低い小学校教科書では、動物の登場回数はおびただしい。たとえば教育出版の二年生用教科書を見てみよう。物語教材では「ひっこしてきたみさ」に犬、「いなばのしろうさぎ」にうさぎ・わに、「きつねのおきやくさま」にきつね・ひよこ・あひる・うさぎ・おおかみ、「わにのおじいさんのたからもの」にわに、「アレクサンダとぜんまいねずみ」にねずみ・とかげが登場する。説明文教材では「すみれとあり」にありが、「さげが大きくなるまで」にさげが取り上げられる(題の文節の区切りでしばしばひとマス分空けて

あるのだが、本稿ではこれを詰めて表記する。以下同様)。その他詩や活動教材にも動物が登場する。全教科書・全学年の動物を対象にすると数が多すぎるので、ここでは物語教材、中でもきつねが主要な登場人物として活躍する作品に限定する。総称してきつねものと呼んでおく。

現在使用されている平成二四年度版(二三年発行) 小学校教科書・五社五種類にきつねものが何作あるか調査を行った(三省堂別冊「学びを広げる」は除く)。学年の下のものから順に並べると以下の通りである。なお、きつねが他の複数の動物と同じ扱いで登場する作品が、香山美子「どうぞのいす」(一年生用三省堂)など数作あったが、これは除外した。作者名の表記はひらがなが多く使われているが、一般的な表記に直した。

- ・香山美子「はじめは「や!」」(一年生用学校図書)
- ・松谷みよ子「花いっぱいになあれ」(一年生用東京書籍、二年生用学校図書)
- ・内田麟太郎「あしたも友だち」(二年生用東京書籍)
- ・あまんきみこ「きつねのおきやくさま」(二年生用教育出版、三省堂)
- ・森山京「黄色いバケツ」(二年生用光村図書)
- ・松谷みよ子「ばけくらべ」(三年生用光村図書)
- ・新美南吉「手ぶくろを買いに」(三年生用東京書籍)
- ・新美南吉「ごんぎつね」(四年生用教育出版、三省堂、学校図書、東京書籍、光村図書)
- ・宮沢賢治「雪わたり」(五年生用教育出版、六年生用三省堂)
- ・安房直子「きつねの窓」(六年生用教育出版、学校図書)

以上一〇作のべ一八回使用されている。教育出版・学校図書・東京書籍が四作、三省堂・光村図書が三作である。先述したとおり、動物の登場する物語教材自体が大変多いのだが、とりわけきつねの活躍ぶりは目立っていると言える。

現代人にとってきつねとは不思議な生き物である。われわれの大半は、きつねの実物を見る機会はほとんどない。動物園にはおらず、テレビの自然番組でもきつね

が映し出されることはまれである。その一方で、稲荷神社にきつねの石像があり、絵(本)・アニメ・マンガの中に視覚化されたきつねはあふれている。きつねは現実に存在する動物というよりは、シンボルでありキャラクターなのである。

では、なぜこれだけ教科書の中できつねが愛されているのか。いま世間に流通する子ども向けメディアにきつねの登場が多く、それが素直に反映されている、という考えが成り立ちうる。そもそも民俗学や文学的知見をたどれば、日本では古来説話や伝承の中できつねは特別な存在であり、また稲荷神の使いとして広く信仰の対象になっていったという事実がある。それほど昔ではなく近代でも、きつねは里の近辺に住み、人と関わりを持ち続けていた。いずれもきつねものの多さを説明する根拠として正当なものであろう。

きつねが特別な存在だったという立場からきつねものを眺めた時、注意しなければならないことに気づく。教科書のきつねものすべてが、きつねがきつねである必然性を持っているわけではない、ということである。きつねである必然性とは、たとえば賢く相手をだます、化ける、神に近い、家禽類を奪う、狩猟の対象となるといった、前段で説明した日本古来の民俗学的・文学的、あるいは過去の生活習慣に基づく属性を指す。こうした属性にあてはまるきつねが登場するのは、一〇作中「きつねのおきやくさま」「ばけくらべ」「手ぶくろを買いに」「ごんぎつね」「雪わたり」「きつねの窓」の六作(のべ一三回)である。これを多くと見るか少ないと見るかは意見の分かれるところだが、本稿は多いという立場を取る。

特別な属性を与えられてきつねが登場するのは、日本の民俗や文学的伝統、あるいは動物との忘れられつつある関わりを、教科書が尊重し、伝承しようとしているからだ、と考えるのは、あながちうがった見方とは言えないだろう。編集委員の誰もそのような意図を持っていなかったとしても、それは集合的無意識として教科書に現れており、児童はきつねという記号の意味を学ぶ。そのことに最も貢献するのが、長期安定教材の「ごんぎつね」にほかならないのである。

他の四作の扱い方について述べる。これらに登場するきつねは一、二年生用教科書に集中しているが、きつねとしての属性を持たないどころか、動物をすべて人に置き換えてもストーリーに大きな問題は生じないと思われる(松谷みよ子「花いっ

ばいになあれ」はいくらか問題があるが)。そこでこの四作の考察は、きつねが現代において愛されるキャラクターであることを直接反映したものの、という点にとどめ、残りの六作について、あらずじを紹介する。大きく分ければ、昭和戦後期の女性作家作品と、大正から昭和初期の男性作家作品の二種になる。

・あまんきみこ「きつねのおきやくさま」

きつねがひよこ、あひる、ウサギを順に連れ帰り、養う。太らせて自分の食用にするつもりだったが、相手からはやさしい、親切、神さまみたいだと感謝され、信頼を寄せられる。ある日おおかみに襲われ、きつねはひよこたちを守るために戦って死ぬ。ひよこたちはきつねの墓を作り、涙を流す。

・松谷みよ子「ばけくらべ」

たぬきときつねが化かし合いをする。初めはまんじゅうに化けたきつねにたぬきがしてやられる。二回目は、本物の大名行列にたぬきが化けたと勘違いして、きつねがひどい目にあわされる。きつねは山へ逃げ帰り、たぬきは喜ぶ。

・新美南吉「手ぶくろを買いに」

人間の店できつねが手ぶくろを買いにしようとする。人間の手に変えられた方の手を出す代わりに、間違っときつねのままの手を差し出してしまふ。帽子屋は受け取ったものが木の葉ではなく白銅貨だったので、化かそうとしているのではないと考えて手ぶくろを渡してやる。きつねは帰りに人間の親子がきつねの親子の話をしてるのを聞き、母が恋しくなる。母ぎつねは人間はおそろしいと繰り返し、帰ってきたきつねは人間は怖くないと言うが、母は本当に人間はいいものかしらとつぶやく。

・新美南吉「ごんぎつね」

ごんと呼ばれるきつねは、兵十の捕ったうなぎを盗んだ後で、兵十の母の死を知る。うなぎが病気の母に食べさせるためのものだったと考えたごんは、いたずらの罪を償おうとして、自分と同じ孤独な境遇になった兵十に食物の贈与を続けるが、そのことを知らない兵十に撃たれて死ぬ。

・宮沢賢治「雪わたり」

子供二人がきつねの小学校の幻灯会に招待される。そこできつねから出されたきびだんごを、化かされているかもしれないとためらうが結局食べる。きつねたちは喜び、これからはきつねの評判を落とすまいはやめようと言う。二人はどんぐりや栗をお土産にもらう。

・安房直子「きつねの窓」

山で道に迷ったほくは不思議な場所に出る。人間の子供に化けたきつねが指を青く染めていて、その指でひし形の窓を作る。そこには鉄砲で撃たれて死んだ母ぎつねの姿が映っている。独りぼっちのほくも指を染めてもらい、昔好きだった少女や小さい頃住んだ家を見、母や死んだ妹の声を聞く。ほくが山小屋へ戻って指を洗うともう何も見えなくなる。次の日きつねの家を訪ねようとしたが見つからない。

六作はいずれもきつねと、人を含めた他の動物の間に、友愛ではなく敵対関係があり、そのことを前提として物語が展開する。ただし民話を原話とする「ばかしあ」は同類だから起こる対立であり、両者の間に明確な非対称性がある他の五作とは異なる。

「きつねのおきやくさま」では、きつねはひよこ・あひる・ウサギにとって元々仲間ではなく、彼らの捕食者である。「手ぶくろを買いに」では、母ぎつねは人に恐怖を抱き心を許していない。それはかつて友人のきつねが人間の家からアヒルを盗もうとして見つかり、命からがら逃げた過去があるからである。このエピソードにおいて、人ときつねは敵対する。命の危険を感じるのはきつねの方のみであり、両者の関係は対等とは言えない。「ごんぎつね」は盗む／盗まれる関係として敵対が強調され、そこから反転してきつねが一方的に接近を試みるが、殺す／殺されるという出来事によって両者は隔てられる。殺す側に立てるのは人間のみである。

「雪わたり」では、きつねがだます側、人がだまされる側で、善良な人間と悪いきつねが前提となる。「きつねの窓」のきつねはきつねとして姿を現すのではなく、人に化ける、つまり人をだますことで人に近づこうとする。以上見てきたように、きつねは言葉話し感情を持つという意味では擬人化されつつも、異類として差別化されている。仲間ではないという地点が出発点になっている。

物語を発動するのはこの差別化である。差異が両者の間に緊張感をもたらし、差異の解消へ向けて物語が動いていく。これはむしろ物語全般の特性なのだが、とりわけきつねものに関しては異類という設定からこれが見えやすいとは言える。

六作すべてに共通するわけではないが、重要と思われるいくつかのポイントを説明する。まず食べることである。他の動物を食べてやろうという内面の声として「きつねのおきやくさま」、あるいは人の食べ物を奪って自分が食べる行為によって「ごんぎつね」、酔った大人がきつねが作ったらしい怪しげなまんじゅうやそばを食べる行為として「雪わたり」。きつねの中で食べる行為はモチーフの一つになっており、害意として現れる。きつねが異類と関係を持つのは、食べることによってである。

では食べることは単に害意のみなのか。実は食べることは、相手への贈与に転化している。きつねは仲間ではない。だが、そのようであるきつねは、だからこそ食べることを伴う贈与を行い、その贈与に重い意味が与えられるのである。

「きつねのおきやくさま」では住まいを提供し、食事を与え続け、「かみさまみたいなお兄ちゃん」と言われる。「ごんぎつね」ではくりや松たけを贈り、それは「神様のしわざ」と解釈される。「雪わたり」では、出会ったばかりの子供たちにだんごを与えようと、幻灯会に招待し、そこでまただんごを出す。

食えることが登場しない場合はどうか。「きつねの窓」では猟師のぼくはきつねに指を染めてもらう。代わりに鉄砲を与えるのだが、それはきつねが撃たれないこと、きつねの安全を一時的に保証するものである。染めた指は人間の世界では手に入らないかけがえのないものであり、大切な過去、思い出に再会させてくれるのである。これは交換ではあるが、希少性においてぼくの受け取ったものの方が高い。やはりきつねは贈与する。

しかし贈与の意味は相手に了解されない。「ごんぎつね」はまさに了解をめぐる悲劇である（了解を可能にするには死を代償とするほかない）。「きつねのおきやくさま」は了解されないことが、つまり誤解が最後まで一貫する。「雪わたり」はいたずらか好意かは酔っていない状態で食べてみて初めて分かる。つまり誤解か了解なのかの判断の困難が問題になる。だが好意だとしても、なぜそれが自分たちに対

して行われたのかははっきりしない。なぜ自分たちが幻灯会に招待されだんごをもらうのか、自分たちだけが選ばれた理由は明らかにはならないのである。「きつねの窓」では、なぜぼくが一番見たいと思っていたものをきつねが見せてくれたのか分からない。四作ともにきつねの意図は相手に了解されないのだと言える。相手にその意図が伝わっていない贈与。それは超越的なものとセットになる。

四作のうち「雪わたり」を除いた三作において、端的に言ってそれは死者と神である。きつねの贈与は死に関わり、了解不能であるがゆえに神を召喚し、神さまがきつねと相手の間に距離を作り、死を招くのである⁶⁾。「きつねのおきやくさま」の場合、「きつねお兄ちゃん」の呼び名が「かみさまみたいなお兄ちゃん」に変わり、死者となって涙を捧げられる。「ごんぎつね」では神さまだと勘違いされたごんは結局死ぬ⁷⁾。贈与が始まったきつかけは兵十の母を死者として送る葬列を見たことである。「きつねの窓」は神さまへの言及はないが、死が複数登場する。ぼくは失われた存在である少女や母、死んだことが明記されている妹に出会う。それを可能にしてくれたきつねは鉄砲に撃たれることで母を失っている。ぼくもきつねも窓を通して死者に出会う。きつねは死なないが、ぼくは二度と彼に会えないという点で、死者同然である。

言及しなかった「ばけくらべ」と「手ぶくろを買いに」はどうだろうか。両者は贈与と言うよりは交換の問題としてとらえられる。「ばけくらべ」では、第一回目のやり取りで、たぬきときつねは化かすことを交換し合う。第二回目では化かさないで化かすことをたぬきが行う。たぬき自身が「化」と「非化」をひそかに交換してしまうのである。ただしこの物語には、死や神といった外部は登場しない。「手ぶくろを買いに」の場合、きつねは葉っぱではなく人間のお金で、手ぶくろを買い。これは等価交換である。ここにも死や神は登場しないのだが、先述した、きつねの意図が相手に了解されるかどうかが問題になる。子ぎつねは、自分が何者であろうと、白銅貨と手ぶくろを交換して欲しいという自分の意図は了解されたのだと考える。ところが母ぎつねは、子ぎつねの話を聞いた後でも疑い続ける。人間はいいものかしらというつぶやきは、きつねと人との間にズレが生じ続けることを確信した発言である。実際帽子屋はお金が葉っぱではなく本物だったから商品を渡したに過

ぎない⁸⁾。それを子ぎつねが善意に解釈するのは、単なる交換を贈与としてとらえているに等しい。子ぎつねこそが相手の意図を了解し損なっているのである。

小学校教科書のきつねものを並べて読んだ時、贈与や交換が主題化されていることが分かる（その多くは一方的な贈与である）。元々隔てられていた異類同士が贈与によって出会い、関係を持つ。壁が乗り越えられ、両者が接近するかに見えて、その接近に障害がもたらされ、再び切り離しが行われる。接近の原因や障害の元として神や死者が呼び寄せられる。また一方の意図は相手に了解されない。これらを合わせて言えば、小学校教科書のきつねものは、異類との贈与・交換というコミュニケーションとその困難が主題化されていると言える⁹⁾。そしてその物語の背景として、死者や神の姿が垣間見え、超越的な世界への扉が開いている。

二 「赤い鳥」の中のきつねもの

「赤い鳥」は大正七年鈴木三重吉によって創刊された童話と童謡、投稿綴方を中心とする月刊児童雑誌である。昭和四年二月から昭和六年一月までの間休刊し、昭和一年鈴木三重吉の死をもって廃刊になった。ここでは休刊前の昭和三年から四年二月までと、復刊後の六年二月から七年一月までの誌面を見てみることにしよう。南吉が「ごんぎつね」を教室で生徒に話して聞かせたのは昭和六年初夏、草稿に記された日付は同年一〇月四日、「赤い鳥」掲載は昭和七年一月である¹⁰⁾。範囲を昭和七年末まで広げたのは、南吉への影響を調べるのではなく、「ごんぎつね」を「赤い鳥」の同種の作品の一つとしてとらえるためである。なお、以上の「赤い鳥」の年月は発行日であり、読者の手元に届いた期日と一致するわけではない。

まず気づくのは、やはり現行小学校教科書と同じく、動物の氾濫ぶりである。そもそも雑誌タイトルが「赤い鳥」であり、大正七年の創刊号の表紙には馬（少女を乗せた馬）が描かれていた。調査対象範囲の表紙及び巻頭の画報（白黒写真）においても、ひんばんに動物が現れる。視覚イメージ、活字の両面でまんべんなく動物が活躍するのである。活字を分類しておくくと、韻文より散文の方が動物比率が高い。

「ごんぎつね」の載った昭和七年一月「赤い鳥」の動物を挙げておこう。表紙が

猿、画報に海鳥や羊や犬やライオン、馬が登場する。目次カットは象、低年読物に「せにがめ」、童謡に「腰折雀」「雀の卵」などがある。

ここでは散文のみ扱う。ノンフィクション（投稿綴方）とフィクション（童話など）に分けるとどのような違いがあるのか。

投稿綴方はリアリズムに基づいて書かれている。したがって登場する動物は読者の身近に存在するものであり、話したり感情をあらわに示したりすることはない。もちろん童話の方もさまざまな傾向があり、とりわけ馬や犬が登場するものはリアリズム系が見られるのだが、非リアリズム系が多いのは間違いない。

それでは童話の方の個々の作品を検証していこう。まずきつねものだが、きつねが登場してある程度の役割を果たす童話作品は九本ある。注目したいのは、きつねが人を化かす（だます）こと、きつねを殺すかどうかが問題になること、きつねが贈与すること、以上の三点である。

現行小学校教科書のきつねものと同様に、きつねは人を化かすものとして現れる。宮原晃一郎「狐の返報」（昭和三年五月）、下村千秋「きつね」（昭和三年一月）、坪田譲治「村の子」（昭和六年一月）、戸田龍「目ぐすり」（昭和七年三月）などがそれに当たる。ここで化かすことは人を害する可能性があり、人をだましたりいざしったりすることと類縁関係にある。きつねは害獣として（少なくとも害を与えることがある動物として）描かれる。そこで人はきつねを殺そうとする。

きつねを殺すかどうか問題になる作品は、柴田賢一「山でとれた鰻」（昭和三年二月）、宮原晃一郎「狐の返報」（前出）、鷹見晏「狐の親子」（昭和七年五月）である。三作に共通するのは、きつねと人が激しく敵対する点である。このうち「狐の返報」「狐の親子」では、きつねも負けじと反撃する。「狐の返報」ではきつねは自分を撃ち殺そうとした男を何度も化かして仕返しする。「狐の親子」では祖父・父・子を殺され、さらに別の子を生け捕りにされた母ぎつねが獵犬を殺し、結局人は子ぎつねを母に返してやる。「山でとれた鰻」では鶏を盗むきつねに対し人は罠を仕掛けて殺していくが、ある出来事からきつねを殺すのをやめる。人がきつねを殺すことを問題化する点では、教科書より「赤い鳥」の方にその傾向が強い¹¹⁾。

三作のうち、取り上げられたモチーフの関連性もともと「ごんぎつね」と近い

柴田作品について、別の側面から補足しておこう。

「山でとれた鰻」のあらすじは次の通りである。葉売りの行商の男がある村にやってきてうなぎをつかまえる。その村では鶏を盗むきつねのために罠を仕掛けていた。男は罠にかかったきつねを見つけると、きつねを奪い、代わりにうなぎを置いておく。うなぎを発見した村人は、社の神のたたりと考え、きつねを殺すのをやめる。噂が広まって社は参拝客で賑わう。行商の男は三十年後にその村を訪れるが、自分のしたことを忘れていた。

食用に捕ったうなぎを人は結局食べない。村人は不思議に驚き、神の行為と考える。いたずらが大事になる。きつねが殺される／殺されない。

このような点で、「ごんぎつね」発表に四年ほどさかのぼる柴田作品には、「ごんぎつね」の物語を構成する要素が含まれている。もちろんこれは偶然であろうが、こうした要素自体が特殊なものではないことを確認しておきたい。

それでは先の観点にもう一度戻ろう。きつねが反撃することによって、あるいは偶然から、きつねの捕獲・殺生が中止されるのは、残酷さへの反省や人と動物との間の共生が模索されていると考えることができる。

この観点は、他の散文の方にもうかがえる。範囲をきつねものの童話から広げて、童話以外の動物に関する文章や他の動物もの童話から見よう。たとえば投稿綴方の婦山繁「どぶ鼠」（昭和六年三月）である。これは二人の小学生の少年がどぶねずみをいじめて殺してしまう話である。一方の少年は最後に嫌になってやめようと言うが、結局ねずみは死んでいた。題材から誰もが志賀直哉「城の崎にて」（大正六年五月）を想起するこの文章は、感情をできるだけ排して淡々と事実を述べており、そこから浮き彫りになるのは、人の残酷さとねずみの哀れさであり、言外に反省や後悔が読み取れる¹²⁾。

「赤い鳥」は科学的な説明文を掲載している。ここでも動物がよく取り上げられる。たとえば、田代庸「たすけあひ」（昭和六年一月）は、題の後に「(理科)」と付けられた文章である。動物は自分が生きるために他の動物を食い殺したりするが、一方では共生とって助け合って生きている、といった趣旨が書かれている。

具体例としてワニとチドリ、蝶や蜂と花、ヤドカリとイソギンチャク、アリとアリ

ノスノキの組み合わせが挙げられ、科学的かつ教訓的な内容である。田代は他に「人間と昆虫」（昭和六年九月）もあり、すばらしい働きをする虫たちが、人間との比較で賞賛されている。これら田代の文章は、人という一生物を客観視してその傲慢さをいましめる役割を果たす。他の作品と共鳴し合い、主張を強め合っているように思われる。

きつねもの以外の動物童話を含めて、「たすけあひ」に近い主題を挙げてみよう。人と異類との間でものやり取り（ほとんどの場合は感謝の気持ちとして）をする例が多い。山本純三「河童祭」（昭和三年八月）、森三郎「かさ、ぎ物語」（昭和六年一月）、森三郎「虎」（昭和七年二月）、戸田龍「目ぐすり」（前出）、堀歌子「河童」（昭和七年六月、題の後に（伝説）とあり）、中村吉麿「狐」（昭和七年一月）、森三郎「お染め」（昭和七年十二月）などが該当する。河童は呪いを解いてもらったお札に金銀を贈り、妻となったかさ、ぎは布を織って渡し、虎に養ってもらった男は豚の料理を出し、目薬をもらったきつねはたけのこや栗や松たけを置いていく。いたずらで捕まった河童は解放の札に鯉を贈り、泥棒が隠したお金を庄屋に返した子ぎつねは、鶏を盗みに入って捕まえられていた親ぎつねを返してもらった上、ご飯を食べさせてもらう約束を取り付け、こうやくをもらったムジナはアケビを贈る。「赤い鳥」誌面には、交換・贈与という形を取りつつ、教科書以上に積極的に動物（架空の生物である河童を含め）との交流が描かれている。交換・贈与はなめらかである。

以上のような例を参照するならば、フィクションかそうでないかを問わず、「赤い鳥」の、少なくとも「ごんぎつね」前後の誌面には、動物に慈悲を持つことや異類との共生という主題が見取れることがわかる。動物もの全体の中にそのような要素があり、その中であらためてきつねと人との関係を見るならば、きつねは元々人をだましたり化かしたり人のものを盗んだして生きてきたが（害獣でありトリックスターである）、それをやめる。そして人に贈与する。このような新たな関係性が見えることになる。関係性はほぼ成立して終わっており、この傾向は教科書作品よりも強い。

このような場の中に置かれた「ごんぎつね」は、やはり共生を語る物語の一つの

バリエーションとして読まれることになるだろう。ただしほとんどの作品がハッピー・エンドに、つまり共生が成功した状態で終わるのに対し、「ごんぎつね」が一方の側の死で終わる悲劇として書かれていることは無視できない。贈与する異類が死ぬ例は他に見られない。もちろんぎつねの死は存在する。先に見てきたとおりぎつねと人の敵対関係の中で物語として描かれてきた要素ではある。だが死が中途か最後までという違いは大きい。単純に分けるならば、教科書のぎつねは最後に死んだり姿を消したりし、「赤い鳥」のぎつねは途中で死ぬ。最後のぎつねの消滅は美化される。「赤い鳥」的なスタンダードな共生を求めるとの願いの場では、ごんの死は異質であり、「ごんぎつね」は違和感を残す。

三 「ごんぎつね」の構造

第三章では場の問題から離れて、「ごんぎつね」そのものを読んでいくことにしよう。二つの点を順に述べる。第一に「ごんぎつね」は、反復・反省と遅れの操作によって成り立つ物語である。第二に「鶴の恩返し」とよく似た話形を備えている。まず第一の点である。「ごんぎつね」の物語上の主要人物は、ごんと兵十である。ごんは兵十に対していたずら（盗み）をした後で、反省する。兵十はごんを撃ち、反省する。兵十の反省は直接描かれてはいないが、「兵十は、火なわじゅうをばたりと取り落としました」という描写は、間違ったことをしたという思いを表現している¹⁰と見なしてよい。

両者は相手を害する行為をし、反省する。この構造の反復をまず押さえなければならぬ。ところが、行為から反省にいたる時間には大きな差がある。ごんが自分の行為の意味を知るまでにかかる時間は長く、兵十のそれは一瞬である。これが物語上のサスペンスを生み出す。

ではどうしてこのような差が作り出されたのか。ここには情報伝達の速度の問題がある。ごんは当初自分の行為をいつものいたずらとしかとらえていない。しかしその後意味が変化する。いつもは一度きりになるのだ。第二章を見てみよう。「十日ほどたって」、ごんは弥助と新兵衛の家内の様子の変化に気づき、村で何かがあ

る、それは秋祭りだろうかと考える。「こんなことを考えながらやってきましたと、いつのまにか」兵十の家の前に来ていて、人が大勢集まっているのを知る。ごんは兵十の家の誰かが死に、葬式が行われようとしているのに気づく。「お昼が過ぎると」ごんは墓地に行き、葬列を待ち受ける。「やがて」葬列が来て、兵十が位牌を捧げているのを見、兵十の母が死んだのだと推理する。「十日ほどたって」「いつのまにか」「お昼が過ぎると」「やがて」などの言い回しが、時間の経過を強く意識させる。兵十の母の死という情報はごんにゆっくり伝わる。それは読者にゆっくり伝わるということである。物語の展開上の重要な事実¹¹は小出しに、じらすように、遅れて伝えられる。じらされているのは、ごんの視点を内包した読者自身である。

しかし最も重要な情報はまだ読者に届いていない。第二章の最後、やはり時間の経過を示す「そのばん」という語が提示された後、ごんは穴の中で考える。

「兵十のおつかあは、とこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから、兵十は、おつかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのまま、おつかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思ひながら、死んだんだらう。ちよつ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

作品を描写と会話・内言に分けるならば、「ごんぎつね」は会話・内言の部分がそれほど多くはない¹²。しかも一回の長さが短い。ところがいま引用した第二章最終部分のごんの内言だけ例外的に長いのである。この特別な長さ自体、意味の重さをもたらすのだが、長さはやはり時間に関わる。母がうなぎが食べたいと言う↓兵十がうなぎを捕る↓ごんがうなぎを奪う↓母はうなぎを食べられない↓食べたいと思ひながら死ぬ。このストーリーは、ごんがうなぎを盗もうとする以前から始まっている。ごんと兵十をめぐる物語はより過去にさかのぼり、時間が引き延ばされる。そしてそのストーリーはごんと兵十をめぐる物語ではなく、親子の物語であり、子から親への贈与と、贈与の無効と、死の物語として語り直されている。読者はここ

で登場人物を代えた、別の場所のもう一つの時間に出会い、ごんと兵十の物語をも一度異なる意味で体験させられることになる。それは知ることを遅らせる手法がもたらしたものである。

この構造が反復される。兵十がごんを撃つのは、またいたずらをしに来たと思っただからである。そこにもう一つの物語、ごんの贈与の物語があることを兵十は知らない。兵十はかつてごんがそうだったように、知ることが遅れる。相手を害する行為をして、死が訪れ、贈与のもう一つの物語を知って反省する。しかしもはや遅く、贈与は無効になる。

ただし兵十の場合はごんと違い、行為から知ることまでの時間が短い。ごんと同様に遅すぎたのだが、ごんと違って速く知るのである。

なぜこの違いが生じたのか。それは読者が知っているか知らないかに関わる。前者（うなぎの意味と母の死）の場合は、読者は重要な情報を元々与えられていない。視点はごんにあり、読者はごんとともにそれを知る。ところが後者（贈与者がごんであること）の場合、ごんの視点に寄り添い、ごんとともに考え行動していた読者はすでに、ごんの贈与の物語を、ごんの意図が兵十に伝わっていないことを含めて承知している。ごんとともに全体を知り、兵十がそれ知らないでいることまで知っている読者には、もはや知るべき新たな情報は無い。いつになったら兵十は気づくのか、それが最大の関心事である。兵十の無知という物語は、第四、第五章の兵十・加助のやり取りで時間をかけて展開されている。読者は十分待たされ、じらされていく。したがって、クライマックスを迎えた以上さらに遅れを追加する必要はない。それどころかここには速さが必要である。読者は兵十が重要な事実を知ること、衝撃を受けることをすみやかに期待するからである。

第一章から第五章までほぼごんの位置にあった視点は、第六章では兵十に移り、読者は兵十に寄り添うことになる。だが読者の中にはごんが大きく存在している。だから読者はごんの死にショックを受ける。兵十はショックを受けていない。ここで読者はいったん兵十から離れごんの側に付く。ところが死の衝撃の余韻が消える前に、兵十の衝撃が示される。兵十の受けた衝撃を、読者は今度は兵十とともに受け止める。兵十の受ける衝撃は一度だが、読者は衝撃を連射される。ごんと兵十は

一度ずつ撃たれるが、読者は二度撃たれる。これが感動の強度を引き出すのである。続いて第二の点を述べる。「ごんぎつね」が、「鶴の恩返し」などの民話のパターンと似ている点である¹¹⁰。異類が人に贈与する。人は贈与されたものを受け取る。ここまでは見えやすい¹¹¹。重要なのはこの後である。贈与者の正体が何であるのか、その行為の真の意味が何であるのかを人は知らない。それを知った時、両者は隔たられ、永遠に別離する（「ごんぎつね」は、異類が人に贈与する場面を見られてはならないというタブーの物語の一類型でもある）。

実は贈与と正体不明は、南吉の他の初期作にも当てはまる主題だと言える。「赤い鳥」掲載童話は、順に「正坊とクロ」（昭和六年八月）、「張紅倫」（昭和六年一月）、「ごんぎつね」（昭和七年一月）、「のら犬」（昭和七年五月）の四作である。これら初期作品に対して、与田準一が「南吉の童話作家としての発想出発が、生きるもののおたがいの、しかしその生存所属を異にするもの同士、流通共鳴を主題としたことが理解されます¹¹²」と述べたのは卓見だが、いま「正坊とクロ」以外の作を見てみよう。

「張紅倫」の青木少佐は大陸で危地を救ってくれた中国人の少年・張に、時計を贈る。一〇年以上後、内地で二人は再会する。青木は時計を見てあの時の少年だと気づくが、張は別人だと主張する。後日、張の手紙が着く。あなたの名誉に関わるから言わなかったと記してあり、張は中国へ去る。「のら犬」は坊さんが村から自分の寺へ帰るまでの話である。犬が付いてくるが途中からきつねではないかと疑う。最後に正体は自分の落としただんごを持ってきてくれたのら犬だと分かる。私にとつて異類である誰かが私に対して贈与的な行為をする。だがその行為者の正体はいったん隠される。こうした手法によって、南吉はサスペンスと緊張感を作り出している。

（国語教育コース所属）

(1) 平成二四年三―四月号は「特集・南吉を書こう」、二五年七―八月号は「特集・新感覚で読む―新美南吉」。

(2) よく引用される昭和四年四月六日の南吉の日記の一節に由来すると思われる。南吉は「やはり、ストーリーには、悲哀がなくてはならない。悲哀は愛に変わる。けれどその愛は、芸術に関係があるかどうか。よし関係はなくても好い、(愛が芸術なら好いけれど) 俺は、悲哀、即ち愛を含めるストーリーイをかこう」と記している。引用は『校定 新美南吉全集 第十卷』(大日本図書 昭和五六年二月)。

(3) 南吉作品は平成二六年現在、小学校三年用で「手ぶくろを買いに」(東京書籍と三省堂)、五年生用で「あめだま」(光村図書)が採用されている。ちなみに南吉作品の教科書採用は日本だけではない。遠山光嗣「南吉をめぐる二十年」(『日本児童文学』平成二五年八月)は、「特に中国において南吉への関心が高く、〇五年からは六割の小学生が使うという教科書に「去年の木」が採用されている」と述べている。

(4) 三省堂の平成二六年度中学三年用教科書は、「確かめよう」18の「文章を読み比べて作品を評価するには」の章で、Bにもとづく現行教科書版とAの両作品を紹介し、「あなたは、「権狐」と「ごんぎつね」のどちらが気に入りましたか。その理由も添えて説明してみよう」という課題を出している。

(5) 鳥越信の発言。「《討論》南吉の文学を問い直す」(『日本児童文学』昭和四九年二月)。

(6) 野中潤「定番教材の起源と生き残りの罪障感」(『学芸国語国文学』平成一九年三月)は、「生き残りの罪障感」という主題で、「こころ」「羅生門」「舞姫」「ごんぎつね」「夕鶴」「高瀬舟」などの共通性をとらえており、興味深い。

(7) 鈴木啓子「『ごんぎつね』の引き裂かれた在りよう―語りの転移を視座として―」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編4年』教育出版 平成一三年三月)は、草稿と『校定 新美南吉全集』版を比較し、「草稿は、神の死者たる(権狐)の犠牲の死をひとつの供儀として、母を亡くした兵士の孤独が癒される「物語」としてある」と述べる。

(8) 西田谷洋もこれを「等価交換」と呼び、「帽子屋は貨幣と商品の互換関係を前提とする商業資本主義のルールに基づき相手が誰であろうと手袋の対価を支払う者に

手袋を渡したただけである」と述べる(『新美南吉童話の読み方』双文社出版 平成二五年七月)。

(9) 「ごんぎつね」に関しては正反対の主張がある。たとえば、鈴木啓子「『ごんぎつね』をどう読むか」(『日本文学』平成一六年八月)は、「ごんを兵士の無意識の分身とみなすとき、ごんと兵士を自立した二人の個とみなした、個と個の意思伝達の難さという読みは、もはや成立しないことである。」と述べる。ここで「分身」というのは、田中実「メタプロットを探る『読み方・読まれ方』―『おにたのぼうし』を『ごんぎつね』と対照しながら―」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編3年』教育出版 平成一三年三月)などの、母を亡くした兵士とひとりぼっちのごんを分身とする見方を指す。

(10) 『校定 新美南吉全集 第三卷』(大日本図書 昭和五五年七月)の解題。
 (11) 小学校教材がこうしたことを忌避しているわけではない。こちらも小学校の「長期安定教材」である「大造じいさんとガン」は、人が動物を撃ち殺すことを前提としている。

(12) 鈴木三重吉「かたつむり」(昭和四年三月)は、植物に害を加えるかたつむりを踏みつぶして殺そうかどうか迷う少年が主人公である。彼は、人は動物を殺すがそれは食べるという目的があるからだと考え、カタツムリを自分の口の中に放り込む。なぜ人は動物を殺すのかという主題に鈴木が関心を持っていたことが分かる。

(13) 先行研究でしばしば指摘されるように、描写は緻密である。

(14) 「鶴の恩返し」を原話とする話は「赤い鳥」の森三郎「かさ、ぎ物語」(昭和六年一二月)にあり、教科書では小学校中学校合わせて採録例の多い木下順二の「夕鶴」にある。教育出版の現行四年生用教科書の下巻には「ごんぎつね」ともこの「夕鶴」が掲載されている。

(15) 鈴木啓子「『ごんぎつね』をどう読むか」(前出)に、「ごんが異類婚姻譚の女性と共通する側面を持つことを示唆してくれる」とある。ただし鈴木は、異類からの贈り物という点に限定しており、本章の主張とは異なる。

(16) 与田準一「南吉童話解説―初期作品を主に―」(『新美南吉童話全集 第一巻』大日本図書 昭和三五年六月)。